

氏 名	く ば めぐみ 久 保 恵
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	教 博 第 22 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 臨 床 教 育 学 専 攻
学位論文題目	情緒的対人情報処理と内的ワーキングモデルとの関連についての研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 岡 田 康 伸 教 授 伊 藤 良 子 助教授 桑 原 知 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は自他に関わる情緒的な情報の受け止め方に個人差があり、そこには内的ワーキングモデルが働いていることを明らかにし、その妥当性を吟味しようとした研究である。著者の考えの基にあるのは、内的ワーキングモデルが情緒的対人情報処理に関係していることと情緒的対人情報処理も内的ワーキングモデルに影響を与えていく相互性があるということなどである。5章から構成されており、その要約は以下の通りである。

第1章は序論で、ボウルビー (Bowlby, J.) の愛着理論と内的ワーキングモデル仮説の実証研究をレビューした。ここで強調された大切なことは、「[発達初期の愛着体験、つまり最初の対人関係を通して、自他についての確信が内在化される。これに基づいて、その後のあらゆる情緒的対人情報処理がなされる。]」と考えられている。こうした個人特有の心的ルールとして内的ワーキングモデルが仮定されている。」ことである。青年期以降を対象とした実証研究においては、愛着表象の個人差を測定するものとして成人愛着面接 (AAI) と成人愛着スタイル質問紙とが有効であることを述べた。そうして AAI による愛着型と、その子どもの愛着型との有意な関連を認める世代間伝達研究が進展し、特定の愛着表象にもとづいて特定の養育行動が導かれるという観点から、内的ワーキングモデル仮説が支持されることを明らかにした。

第2章では「対人恐怖心性と親子関係像についての研究」として、研究1, 2が述べられている。すなわち、情緒的対人情報処理の個人差を主観的対人不適応感である対人恐怖心性の高低から捉え、これと親子関係認識との関連を検討した。研究1は「対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像」で対人恐怖心性尺度と過去の母・父との関係認識尺度と回想動的家族画法により、153名 (男性71名, 女性82名) の大学生を被験者とした研究である。この結果の一部を示すと、次のようになる。対人恐怖心性高群は母親との関係について認知的には親密さを感じながら不信も強いという二重性を示し、交流しがたさを多くしめした。父親との関係については認知的には親密さが低く、不信と怯えが高く、投影的には非交流場面を多く描いた。これらより対人恐怖心性を愛着不安定型の観点でとらえることが示された。研究2は「回想動的家族画法にあらわれた親子関係像の事例検討」と題され、親子状況刺激画への反応と愛着表象・対人関係認識との関連で、事例検討がなされた。視点として、①対人恐怖心性高群の典型例とそれに類似するサブタイプとの比較、②対人恐怖心性高低群間で類似状況を描いた家族画の比較、③対人恐怖心性低群の非典型例の検討である。家族画の比較から両親と共にいる場面を描きながらも、高低群間では安全基地効果に関わる微細な特徴に差異が認められた。親子関係像からうかがえる受容体験の差異は微細のものであっても、対人恐怖の悩みのあり方と関連することなどがしめされた。

第3章は「愛着表象の投影法的研究」で、研究3, 4からなる。研究3は「親子状況刺激画への反応と愛着表象・対人関係認識との関連」で、愛着情緒を自ずと活性化するような親子場面からなる刺激画 (親子状況ピクチャー, PARS) を作成した。方法は一枚につき一つの絵を提示し、「この絵はどういう状況 (場面) でしょうか。登場人物の気持ちはどうでしょうか。(大人・子ども) この後の展開はどうなるでしょうか。」と問う。また、親子体験想起質問紙 (とらわれ型, 回避型, 自己体験型, 情緒希薄型) と対人意識質問紙 (親密, 不信, 孤独因子) が使用された。被験者は302名 (男性129名, 女性

173名)であった。分析1ではPARSにより高信頼群と低信頼群に分類された。他の質問紙との関連から、高信頼群には母親・父親いずれも自己体験型(思い出に接近容易、主体的統合)が多く、低信頼群には母親・父親いずれもとらわれ型(過去の怒りにとらわれ)が多かった。低信頼群の不信得点が有意に高い結果であった。これにより、間接素材への反応の個人差が、被験者の愛着表象や対人関係認識と有意に関連することが支持された。分析2では情報処理の回避型をうかがえる反応として、ストレスや葛藤をさけて不自然な状況設定で作話した被験者を「非典型状況反応群」として抽出し、「典型状況反応群」と比較した。典型状況反応群は母親の自己体験型に多く、非典型状況群は、母親回避型に多かった。親子の自然なやりとりを回避するような反応傾向と、自身の母親との記憶を想起しない反応傾向との関連が認められ回避的な情報処理方略が共通して働いている可能性が示唆された。

研究4では事例研究がなされた。愛着情緒を活性化化する刺激画によって、内在化された記憶が活性化され、これに基づくモデルで情報処理がなされたというメカニズムを支持し、内的ワーキングモデル仮説を裏付けた。

第4章は研究5でもあり、「事例を通した内的ワーキングモデルの変容過程についての考察」である。「子どもが怖い」という主訴で来談した31歳のケースである。彼女の回復過程より、情緒的対人情報処理の経験が内的ワーキングモデルに影響を与えることを示した。

論文審査の結果の要旨

情緒的対人情報処理のあり方がボウルビーの愛着理論と内的ワーキングモデルとに関係あることを示そうとした論文である。発達初期の愛着体験が大人になってからも対人関係に影響を及ぼしていることは事例や経験によって心理臨床では認められており、重要な考えである。しかし、それを実証することは、大事とは考えつつも、難しいことが多く、あまり試みられてきていない。それを正面からテーマづけて、挑戦したことは高く評価された。

内的ワーキングモデルは「愛着のパターンが子ども自身の属性となる傾向を説明するための概念であり、愛着対象との関わりを通して構築された表象モデルに基づいて、その後のさまざまな対人情報処理がなされると考えられている個人特有の心的ルールである。」と定義されている。これは本論文の重要なキーワードであるから、はじめからわかりよく述べておかなければならない。この言葉はクレイト(Craid, K)の言葉であり、ボウルビーの言葉でないので、これが愛着理論の中で使われた経緯などをもう少し緻密に示したら「内的ワーキングモデル」という概念を本論文で使用する意義もおのずから明らかになったであろうと厳しい指摘もあった。

愛着に関して男女差を指摘し、考察している。これは興味深いことである。精神分析では、たとえば、母と息子、父と娘との関係を重視されたりするが、実証的に少しでもこの関係を示しえたのは本論文の貢献であると評価された。しかし、せっかくの指摘がもう少し細やかに分析できたのではと惜しまれた。母親は男性にとっても当然特殊な結びつきはあるし、同性である女性にとっては特別な意味をもってくる。この点がもう少し考察できたのではと指摘された。愛着が母親にたいした場合と父親にたいした場合で異なるとまでは示されたが、母親と女性、母親と男性、父親と女性、父親と男性の4つの場合に分けて分析すると、さらになにかが明らかになったかもしれない、残念であると指摘された。

なされた研究は、情緒的対人情報処理の経験が愛着体験すなわち、内的ワーキングモデルによっておこなわれていることを示している。この微妙なことを単に質問紙にだけよるのでなく、投影法をも使用したのは、有意義な試みであった。特に、PARS(親子状況ピクチャー)を作成したのは、今後のこのような研究に貢献するであろうと評価された。

また、研究2, 4, 5で、事例研究によって微妙なところを明らかにしたことも評価された。とくに、研究5のケースによって、内的ワーキングモデルに心理療法での体験が、すなわち、心理療法での情緒的対人情報処理の体験が幼児期の愛着体験で作成されていた内的ワーキングモデルに影響を与えていることを示唆したことは評価された。情緒的対人情報処理と内的ワーキングモデルの相互性が伺えたのである。

現在の情緒的対人情報処理に過去の愛着体験が関係していることを示し、また、それは内的ワーキングモデルとの関係であることを示唆できたことは博士論文として評価できると考えた。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年2月22日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。